

旭ノ川 中ノ川

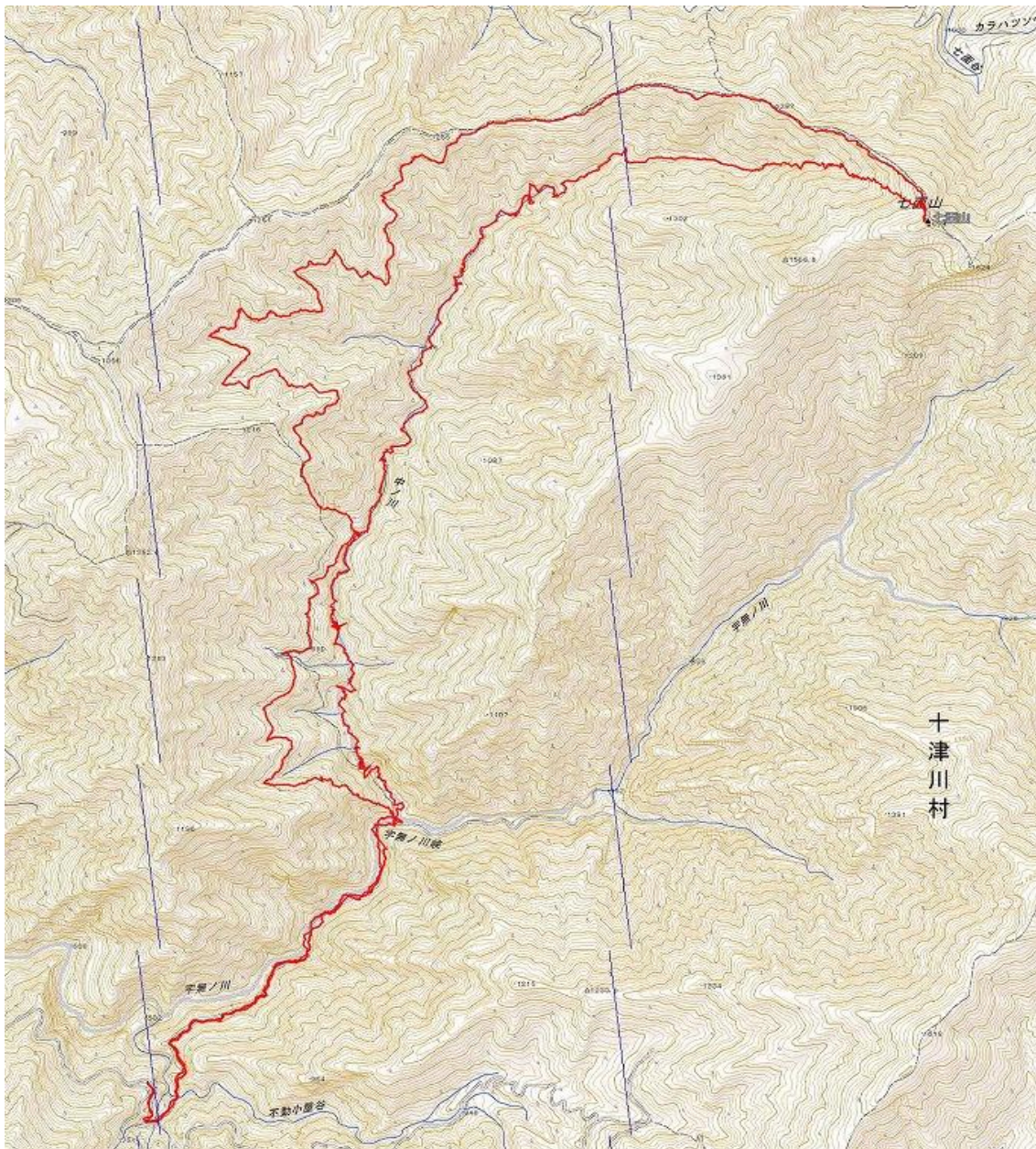
【日程】 2016年8月20日～21日

【エリア】 十津川水系 旭ノ川

【形態】 沢登り

【メンバー】 Y, O

【報告】 O



《ルート／タイム》

8月20日

駐車地 (8:00) ～中ノ川出合 (8:40) ～モジケ小屋 (14:00) ～黒ナメ八丁奥の幕営地 (17:50)

8月21日

幕営地 (7:00) ～七面尾の稜線 (9:30) ～七面山西峰 (10:00) ～P1265 手前の林道 (12:00)
～モジケ小屋 (15:15) ～中ノ川出合 (17:20) ～駐車地 (18:15)

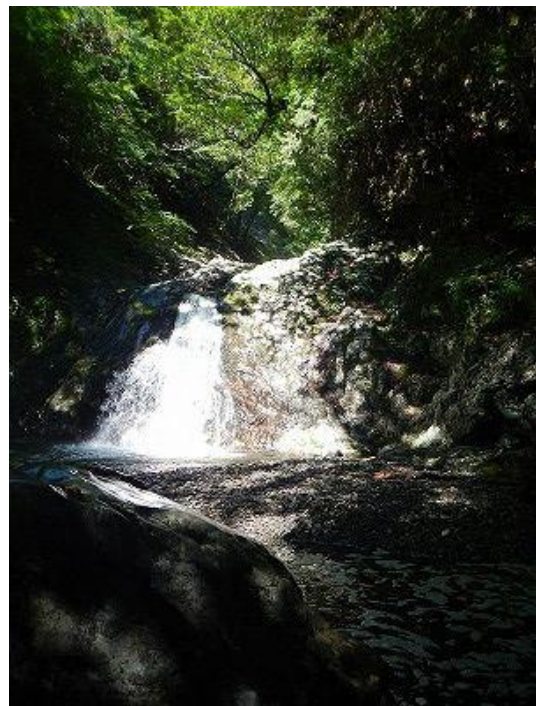
《報告》

8月20日

久しぶりの長い行程の沢遡行となった。私にとって七面山はこれまでも2度目の登頂している。しかし、いずれも七面山登山口からの入山であり、それ以外に沢ルートでの詰め上がりがあるとは当時は想像もしていなかった。

入渓者の記録を色々と参考にさせていただいたが、まず、釈迦ヶ岳登山口への分岐を左に折れると、すぐ見える場所で駐車を余儀なくされる。ここから中ノ川出合までは路面が崩壊しているため、過去には車両進入もできたのであろうが、現在は徒歩で40分はかかる。

出合には、あと数年ももつのか不明くらい不安定な橋が掛かっている。奈良県有林との看板がかかっており、ここが中ノ川への入口だ。階段状の梯子を登り、右手に見える沢に向かって下降を開始する。



(左)入渓吊り橋。途中で板が抜け落ちている。 (右) 5 m滝。上部の淵に懸かるロープが抜け落ちた

最初の関門は5 m滝の上にある淵の突破だ。落ち口を左岸から右岸に向かって渡渉をするルートだが、淵に飛び込んで対岸に渡らなくてはならない。落ち口上部にはよく見ると、上部からぶら下がっているロープと木の棒が捕まるとばかりに自己主張しているが、先頭をいくY氏が落ち口に飛び込んで木の棒を掴んだのも束の間、ロープが見事に抜け落ちてしまった。



(左) 地獄滝。岸壁によって滝下部がみえない (右) 極楽滝で記念撮影。

そのあとの地獄滝40 m、極楽滝35 mは由来は分からないが、いずれも豪快な滝だ。ロープを出して安全に高巻きする。

この中ノ川は前半に大きな滝が連続するものの、その滝と滝の間はなんとも静かな小川の空間が存在する。静と動が中ノ川には両存している、そのような印象を受けた。牛鬼滝を抱える長淵も右岸から巻いていくと、モジケ小屋はもう間もなくだ。後方から賑やかな声がしたと思ったらCS滝を直登してきた遡行者2名が追い抜いて行った。釣りを楽しみながら明日、七面山登山口方面に抜けるという。

ここから先は、平穏なナメ滝などがつづく。しかし、滝の手前には足のつかない淵も多数あり、泳ぎを強いられる。いずれもY氏のリードで次々と突破していく。黒滝40 mは巨大な岸壁から飛沫をまき散らしている。右岸から突破。



(左) 豪快な滝から想像し難い、静寂な中ノ川



(右) モジキ小屋

黒ナメ八丁による滑床を堪能した後は、右岸地に少し高台となったビバーク適地が出てきたので、ここで本日の遡行は終了だ。タープを張り焚火をしながら、和やかなひと時を過ごした。おおむね、一日の天候もよく、晩に雨がパラパラと降った程度だった。

8月21日

翌日も焚火を楽しみ朝7時と遅めのスタート。大きな滝は終了したものの、水が枯れて伏流水となると、巨岩の中を稜線に向かってあえぎながら詰め上がっていくことになる。前鬼川から孔雀岳に詰め上がる沢に似た情景だ。

もう滝はないとたかを括っていたら、涸れ滝8mが迫るように現れる。クライミング要素が試されるが、Y氏のリードのもと突破。中段のテラスから左に回り込み気味によじり上がる部分は外岩経験が少ない私にとってまだフリーでは怖いと感じた。

涸れ滝を過ぎると、スズタケの群生がお出迎え。ここから稜線まではそう時間はかからない。午前中から雨が止んだり降ったりだったが、七面山西峰はガスの中だ。記念撮影をしてすぐに荷物をデポした詰め上がりの稜線まで戻ってくる。

この沢遡行は下山に相当の時間がかかる。まず、七面山登山口までの分岐に向かって下り、そこからは七面尾に沿ってP1265まで稜線を伝う。ところどころにテープで印を打っている。登ったり下ったりの連続だ。林道が見えてきたら、稜線から降りよう。

七面尾に沿って、P1356経由のルートもあるが、林道歩きの方が時間の短縮になるだろう。ただし、整備されている林道とはとてもいい難く、おそらく数年前の台風12号の影響であろうか、林道の崩壊が激しい。倒木、のり面の崩壊など、林道に申し掛かる障がいはいくつも存在する。また天候は晴れに代わり、炎天下での遮るものの無い林道歩きは決して楽ではない。



(左) P 1 2 6 5 付近の林道に降り立つ



(右) 旭山荘。荷物車が置き去りにされていた。

途中、旭山荘と掘られた立派な小屋がでてくるが、車ではとてもたどり着くことは出来ない。利用者は山仕事の職人だろうか。風呂やトイレらしき部屋も確認された。水は背面の小滝から流れ込んでいるから水場としても使える。さらに歩をすすめると、1 2 1 6のある尾根を回り込んでほどなく進んだところで、左手にモノレールの軌道が見えてくる。林道はさらに続いているので、どこまで続いているのかが気にはなるが、モノレール軌道に沿って、モジキ小屋まで劇下りする。下山中でもっとも過酷といえる下りだ。これも台風時の影響か、モノレールは屋根付きの車両庫から外れた場所に放置され燃料タンクにも穴が開き、手入れされている様子も全くない。

モジキ小屋までの劇下りを終え、小屋の裏側に回り込むと、缶ビールの大量の墓場が待ち受けていた。職人が長らく入っている雰囲気もない今、この現状をどう片付けようとするのかが気になって仕方なかった。

中ノ川出合までは作業道を使わせていただくことになる。モジキ小屋にかかっている赤いハシゴ橋を越え、アップダウンが続くままに沢道具をしょい込んでの長いトラバースが続く。ひと1人が通れるかどうかくらいの小道だし、片側は切れ落ちている場所も複数あり、気を抜くことができない。途中、沢の上部を3本越えていく。最初に出てくる奥ガネ谷は水場がある。

3本の沢を越えると、中ノ川出合に向かって下るのみだ。モノレール軌道の下りに比べればなんとありがたいことか。ずいぶんと手入れされていない不安定な木組みの階段がいくつも続く。これを忠実に下りれば、入渓地点のつり橋に出てくる。

これでやっと下山は終わりだ、と安心するものの駐車地点へはここから45分の登りの坂道だ。沢登りと同程度以上に下山にも体力を求められるルートだと言えよう。帰路の旭川ダム発電所での自動販売機で購入したコーラの美味しかったこと。夏の濃い2日間となりました。